

兵庫県出土の木製発火具について

中 村 弘

1. はじめに

近年、発掘調査による成果を広く普及・公開・活用する動きが活発となっている。特に、小学生を主な対象とした古代体験学習が多くの社会教育施設においてなされており、各組織で開発され、実施されるだけでなく、商業ベースに乗って、商品として売買もされている。

その中で、もっとも早くから導入され、かつ広く普及している学習メニューに「火起こし」がある。火を付けるという適当な目的があり、それが成されたときの達成感がゲーム感覚で楽しめるだけでなく、原始より神聖視された「火」という最も身近な化学変化が、子供の心をとらえていることも人気の原因であろう。

兵庫県教育委員会においても、「火起こし」は平成19年度に完成を予定している県立考古博物館の先行ソフト事業の一部として、しばしば行われている学習メニューである。しかし、その反面、意外とその実体は明らかとなっておらず、学習メニューばかりが先行し、遺跡からの出土品に基づいた検証が行われてきていないのが実状である。

最も一般的に体験学習で行われている火起こしの方法は、回転摩擦式の舞ギリ式といわれるもので、これまでは一部の神社において行われた神事でみられた。この舞ギリ式とは回し手の上下運動が、紐を介して、はずみ車をもつ火鑽杵（ヒキリギネ）の回転運動に変わり、回転する火鑽杵と火鑽臼（ヒキリウス）の摩擦によって火を起こすというものである。この方法は18世紀半ばから末頃に始まったとされており（高嶋幸男1985）、遺跡から出土することは稀である。一般的にその当時には以前から行われている火打ち金による火花式が使われており（山田清朝1989）、さらにそれ以前には回転摩擦式のキリモミ式があった。これらの道具については遺跡から出土する例は多い。

今回はこれら発火具のうち、木製の発火具、具体的にはキリモミ式の火鑽杵と火鑽臼について検討を加えることとする。現在、兵庫県教育委員会が保管している木製発火具は火鑽杵3点、火鑽臼88点の合計91点を数え（第1表）、ここではこれらの資料について検討する。

2. 火鑽杵について

火鑽杵が出土しているのは2遺跡3点のみで、統計的に何か導ける状況にはない。形態に特徴がないため判別し難いこともあるが、土中で遺存しにくい樹種であった可能性も考えられる。時代的には古墳時代のものが2点、平安時代末から鎌倉時代のものと思われるものが1点である（第1図）。

使用されている樹種は古墳時代のものがスギ、平安末～鎌倉時代のものがヒノキである。いずれも先端が焦げており、形態が比較的真っ直ぐであるのと、やや丸味をもった棒状であることから火鑽杵と判断した。特に三田市川除・藤ノ木遺跡では、井戸の中から火鑽臼と共に出土しており、火鑽杵である可能性が高いと考えられる。大きさは最大で42.7cm、最小で20.0cmを測る。直径については遺存したものや、火鑽臼に付けられた痕跡から考えて1cmをやや下回る程度の太さであった可能性が高い。

これら遺存した火鑽杵とは別に、遺存しにくい樹種が使用されていたことも考えられる。それは民間

第 1 表 木製発火具一覧表

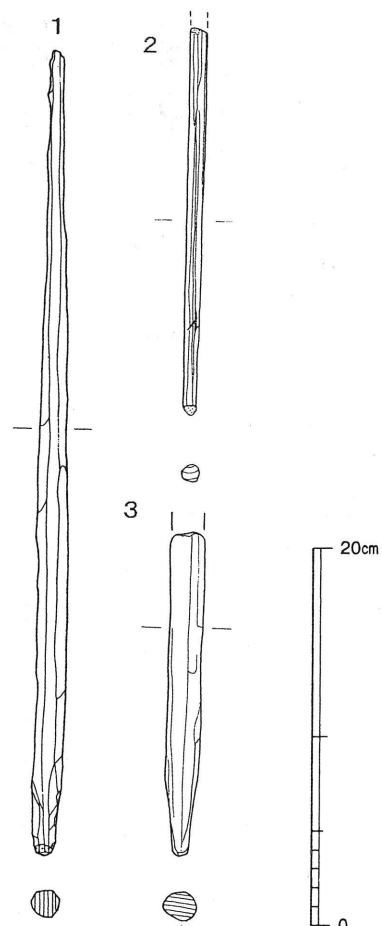
遺跡名	地域	時代	遺物の番号			材について					目について												出土場所	備考						
			報告番号	調査番号	登録番号	法量		樹種	木取り	発露の範囲	遺存状況	目の数				目の位置				目の形状										
						長さ	幅					厚さ	A面	B面	C面	D面	E面	aとcの 長い方	b	直径 (平均)	断面形	傾き			切り込み	挟り込み	未使用の目 位置	数		
火鏝片	川除・藤ノ木遺跡 但馬	平安末～鎌倉 古墳	99	870004	311.2	20.0	0.8	0.7	ヒノキ	—	0.18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	井戸			
			93	970246	693	42.7	1.6	1.4	スギ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	溝			
			159	970246	816	17.0+	1.8	1.4	ヒノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	畦畔			
火鏝臼 袴狹遺跡	川除・藤ノ木遺跡 但馬	平安末～鎌倉 奈良～平安 平安前期 平安前期 平安(9世紀前半) 奈良～平安 奈良～平安 奈良～平安 奈良～平安 古墳～飛鳥 古墳～飛鳥 奈良 奈良末～平安前期 奈良末～平安前期 奈良末～平安前期 奈良末～平安前期 奈良末～平安前期 奈良末～平安前期 古墳～平安	100	870004	311.1	33.4	3.5	1.2	スギ	板	0.33	◎	1	0	0	0	16.7		0.8	1	?	B	?			井戸	舟形?			
			273	940183	562	19.2+	2.9	2.4	?	柱	0.06	×	10+	11+	0	0	0	—	2.4	0.8	5	3	内	B	A?	—	0	包含層		
			710	900039	2001	28.5+	3.5	2.0	スギ	柱	0.25	△	11+	0	0	0	9.8	2.4	0.9	7		内	B	B	外	3	包含層			
			780	900039	1996	54.3	4.6	2.0	スギ	柱	0.15	◎	5	0	0	0	27.3	4.1	1.0	2	1	内?	?	?	?	—	0	包含層		
			998	910021	1506	43.0	4.0	1.4	スギ	板	0.11	◎	3	1	0	0	21.6	2.5		1		?	A	?	?	外	2	包含層		
			1016	910021	1101	24.0	3.5	2.0	?	柱	0.26	◎	1	0	0	0	17.2		1.2	1		内	B	B	—	—	0	包含層	舟形?	
			1211	940182	562	51.5+	3.5	2.0	スギ	柱	0.17	×	14	5	0	0	0	3.3		1		直	A+B	?	?	外	16	溝		
			1246	940182	1345	32.0+	2.3	1.7	?	板	0.17	×	4	0	0	0	0	—	5.2	0.8	1		直	B	A	?	1	包含層		
			1268	940182	1166	50.3	3.8	1.8	?	柱	0.16	○	15	0	0	0	2.7	3.3	0.9	3	2	内	?	?	?	—	0	包含層		
			1483	930124	663	44.9+	3.1	1.7	スギ	板	0.14	△	2	0	0	0	15.3	3.3	1.1	2		内	A	B	—	—	0	包含層		
			1554	930124	1847	11.8	2.6	1.7	スギ	板	0.10	◎	4	0	0	0	3.9	1.3	0.8	2		内	?	?	?	—	—	0	包含層	
			1616	930124	537	20.2+	3.6	0.9	スギ	板	0.13	×	3	0	0	0	0	2.9	1.0	1		内	A	?	?	—	—	0	包含層	
			1668	930124	2641	30.5	3.4	2.1	スギ	柱	0.33	○	8	6	0	0	10.8	2.4	1.0	?	3	内	A	?	?	外	5	包含層		
			1669	930124	245	23.5+	2.7	1.0	スギ	板	0.18	△	4	0	0	0	12.2	2.5	1.0		1	内	A	A	?	外	1	包含層		
			1751	930124	1172	7.6	1.9	1.1	エノキ	板	0.06	◎	4	0	0	0	1.8	1.3	0.7	2	1	内	A	B?	—	—	0	包含層	台付	
			1752	930124	402	30.0+	4.6	1.5	スギ	板	0.19	△	5+	0	0	0	10.3	4.0	0.7	?		内	?	A	—	—	0	包含層		
			1753	930124	375	36.3	4.0	1.9	スギ	板	0.13	○	7	0	0	0	12.3	2.3	0.8	4	3	内	?	A	—	—	0	包含層		
			1754	930124	379	44.0	4.2	1.6	スギ	板	0.33	◎	9	0	0	0	13.2	2.3	0.7	5		内	?	A	外	1	包含層			
			1755	930124	148	37.5	2.8	1.5	?	柱	0.16	○	11	8	0	0	12.5	2.5	0.9	4	8	直	B	A	外	2	包含層			
			1844	930124	2097	16.0	2.7	1.3	スギ	板	0.12	○	5	0	0	0	3.7	2.3	0.8			内	B	A	外	4	不明			
				880080	1123	25.0	2.4	0.8	?	板	0.10	○	2	0	0	0	16.5	2.6	0.9	1		?	B	A	外	1				
				880080	1162	27.0	4.4	1.8	?	板	0.19	◎	6	0	0	0	5	3.5	1.2	4		直	B	B?	—	—	0			
				900039	1997	42.7+	4.9	2.4	?	柱	0.20	△	11	0	0	0	8.2	3.2	1.1	1		直	B	B	不規則	6				
				900039	1998	33.0+	4.4	2.0	?	柱	0.33	△	5	0	0	0	12.2	5.6	1.1	1		内	B	B?	外	1				
				900039	1999	32.8+	4.3	1.9	?	柱	0.46	△	7	0	0	0	10.8	4.0	1.1	3		直	B	A	—	—	0			
				900039	2000	31.1	2.1	1.4	?	柱	0.30	◎	2	0	0	0	0			1		直	B	B	外	1				
				900039	2002	24.5+	3.5	2.1	?	柱	0.12	△	5	0	0	0	7.9	3.7	1.1	2		直	?	?	?	外	2			
				900039	2003	31.4	2.6	1.4	?	柱	0.11	◎	3	0	0	0	13.5	3.8	1.0	1		直	A	B	—	—	0			

火鑽石

— 69 —

第1表 木製発火具一覧表

遺跡名	地域	時代	遺物の番号			材について				臼について										出土場所	備考								
			報告番号	登録番号	登録番号	法量		樹種	木取り	年輪の幅	遺存状況	臼の数					臼の位置		臼の形状										
						調査番号	登録番号					長さ	幅	厚さ	A面	B面	C面	D面	E面			aとcの 長い方	b	直径 (平均)	断面形 凹凸	傾き	切り込み	挟り込み	未使用の臼 位置数
梅焚遺跡 火鑛臼	但馬				940182	353	25.7+	4.4	1.9	?	板	0.23	△	2	4	0	0	0	19.5	2.7	1.0	4	内	A	B	-	0		
					940182	647	28.5+	3.1	2.2	?	板	0.34	△	2	3	1	0	0	20	6.4	1.1	1	内?	B		-	0		
					940182	824	21.5+	3.2	1.8	?	板	0.29	×	10	0	1	0	0	2.2	1.0	0	5	内	B	B	-	0		
					940182	825	21.6+	2.9	1.9	?	板	0.20	△	2	0	0	0	0	11.2	7.6	0.9	1?	内	A	B	-	0		
					940182	872	50.5+	4.5	2.4	?	板	0.33	×	2	0	0	0	0	43+	2.4	0.8	1	内	B	B	-	0		
五反田遺跡	但馬				940183	732	34.7+	3.6	1.5	?	板	0.21	△	5	0	0	0	0	-	-	-	3	内	B	B	外	2		
		古墳	94	970246	2	26.6+	3.8	1.5	スギ	板	0.13	×	5	0	0	0	0	-	2.4	0.9	1	内		A	-	0	溝		
		古墳	95	970246	220	36.5+	3.7	1.9	スギ	板	0.09	◎	4	0	0	0	0	14.3	2.2	0.8	4	内?	B	A	-	0	溝		
砂入遺跡	但馬	奈良～平安	208	970246	6	31.9+	3.8	1.4	スギ	板	0.28	×	5+	0	0	0	0	-	1.9	1.1	1	内?		A	-	0	包含層		
			408	980066	20	35.0+	3.7	1.4	スギ	板	0.16	△	4+	0	7+	0	5.2	3.3	0.9	1	3	直	B	A	-	0	包含層		
		奈良時代	23	870058	1086	24.0	3.0	1.8	スギ	板	0.21	○	7	0	0	0	0	5.9	2.4	0.9	2	1	内	?	?	-	0	包含層	
		奈良時代	163	870058	2760	55.0+	5.0	2.5	スギ	板	0.27	△	13+	0	0	0	0	6	-	1.1	9	2	内	B	A	外	1	被戸付近	
			2198	900037	83	52.0	4.8	1.4	?	板	0.40	○	8	0	0	0	0	23.5	2.9	0.8	0	3	内	B	?	-	0	包含層	
梁田遺跡	但馬	平安時代	V	3																									
			2290	930079	208	25.0+	4.4	2.2	?	板	0.21	△	1+	3+	0	0	0	6.3	-	0.8	1	内	A	B	-	0	包含層		
		平安～鎌倉	2389	930079	103	18.2+	3.3	1.7	スギ	板	0.24	△	7+	0	6	0	0	4	2.2	0.8	7	4	内	B	?	-	0	包含層	
				870058	1085	25.7+	3.4	1.6	?	板	-	△	2	0	0	0	0	16.8	-	1.1	1	?	?	?	?	-	0		
							18.5+	2.8	1.8	スギ	板	0.15	×	6	5	0	0	0	-	-	-	4	内	B	B	-	0	盛地	
片引遺跡	但馬	平安時代			940184	204	36.3	2.8	1.2	スギ	板	0.17	○	6	0	0	0	0	10.2	3.5	1.0	2	1	内	B?	B?	内・外	2	包含層
					940184	197	37.0	3.0	1.0	?							-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0		
		古墳時代	43回	18	790012													-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	包含層
		古墳時代	43回	19	790012	18	24.8	2.7	1.2	?	板	0.24	◎	8	0	0	0	0	4.2	2.2	0.9	1	内?	?	A?	-	0	包含層	
		奈良時代前半	112		129.4	18.9+	2.8	1.8	スギ	板	0.12	△	2	0	0	0	3	6.1	2.9	1.2	4	?	A	?	-	0	包含層		
山垣遺跡	丹波	奈良時代前半	113		176.1	21.5+	1.4+	2.5	?	板	0.08	×	2	0	0	0	0	-	-	-	-	?	?	B	A	外	1	溝	
		奈良時代前半	72		RW	61	33.8	4.6	1.8	スギ	板	0.15	◎	1	-	-	0	16.2	-	0.8	?	直	B	A?	-	0	旧河道		
		奈良～平安	123		RW	30	22.0	3.3	1.7	スギ	板	0.05	◎?	6	3	-	0	14	2.4	1.0	3	内	B	?	内	3	旧河道		
		奈良～平安	124		RW	59	12.7	3.4	1.6	スギ	板	0.15	◎	3	0	0	0	0	4.7	3.0	1.1	?	内	B	B	外	1	旧河道	
		古墳時代前半	79		RW	70	23.0+	2.1	1.3	?	板	0.33	△	6	0	0	0	0	8.9	2.8	0.9	4	内?	B	B	外?	2	旧河道	
八反長遺跡	播磨	古墳時代前半	80		RW	30	28.7	2.1+	1.5	?	板	0.30	○	6	0	0	0	0	7.6	2.2	1.0	4	内?	B	A	外	1	旧河道	



第1図 火鑽杵 1・3. 五反田遺跡
2. 川除・藤ノ木遺跡

に伝承されている火鑽習俗の中にうかがえる。それを見ると、出土例のあるヒノキ、スギ以外に、ウツギ、カズガラ（コウゾガラ）、メダケ（シノダケ）、ムラサキシキブ、シラカバ、ヤマビワなどがある（文化庁文化財保護部 1981）（高嶋 1985）。その中でも特にヒノキとウツギが多い。ヒノキについては、神事が儀式化し、その流れの中で道具が「大型化」と「ヒノキ化」したことがあげられていることから（高嶋幸男 1985）、後世に変化したものも含まれている可能性がある。

また、愛知県宝飯郡一宮町の砥鹿神社では火鑽杵にウツギを使用しているのであるが、この神社の近くに宇都伎神社という神社がある。この宇都伎神社はかつてウツギに囲まれていたらしく、古くはこの神社のウツギを使用して火鑽が行われていた可能性が指摘されている（文化庁文化財保護部 1981）。このように神社の名に残るほど、ウツギと火鑽習俗との関係は深かったものと考えられる。

さらに、火鑽杵の樹種を推定する根拠となるものに、遺跡から出土した火鑽杵の臼底にみられる火鑽杵の痕跡がある。これをみると、臼底が窪むだけのものが 133 個 (65%)、臼底が凸形に突出するもの（写真 1）が 73 個 (35%) を数えた。後者は中空の火鑽杵を使用した際にできる痕跡であり、

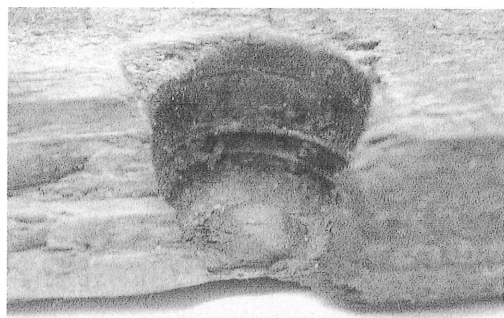


写真 1 凸形の臼底

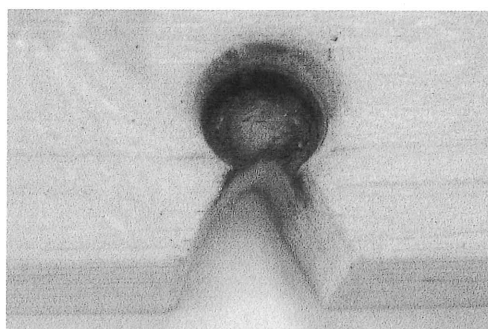


写真 2 実験による凸形の臼底



写真 3 ウツギ（山形町立ヒメハナ公園にて）

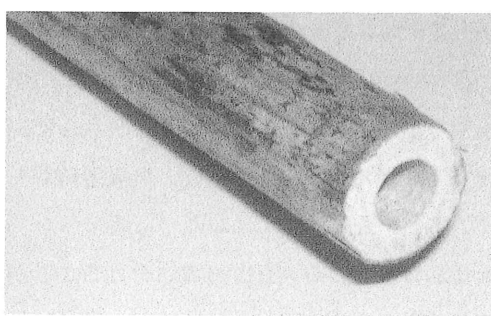
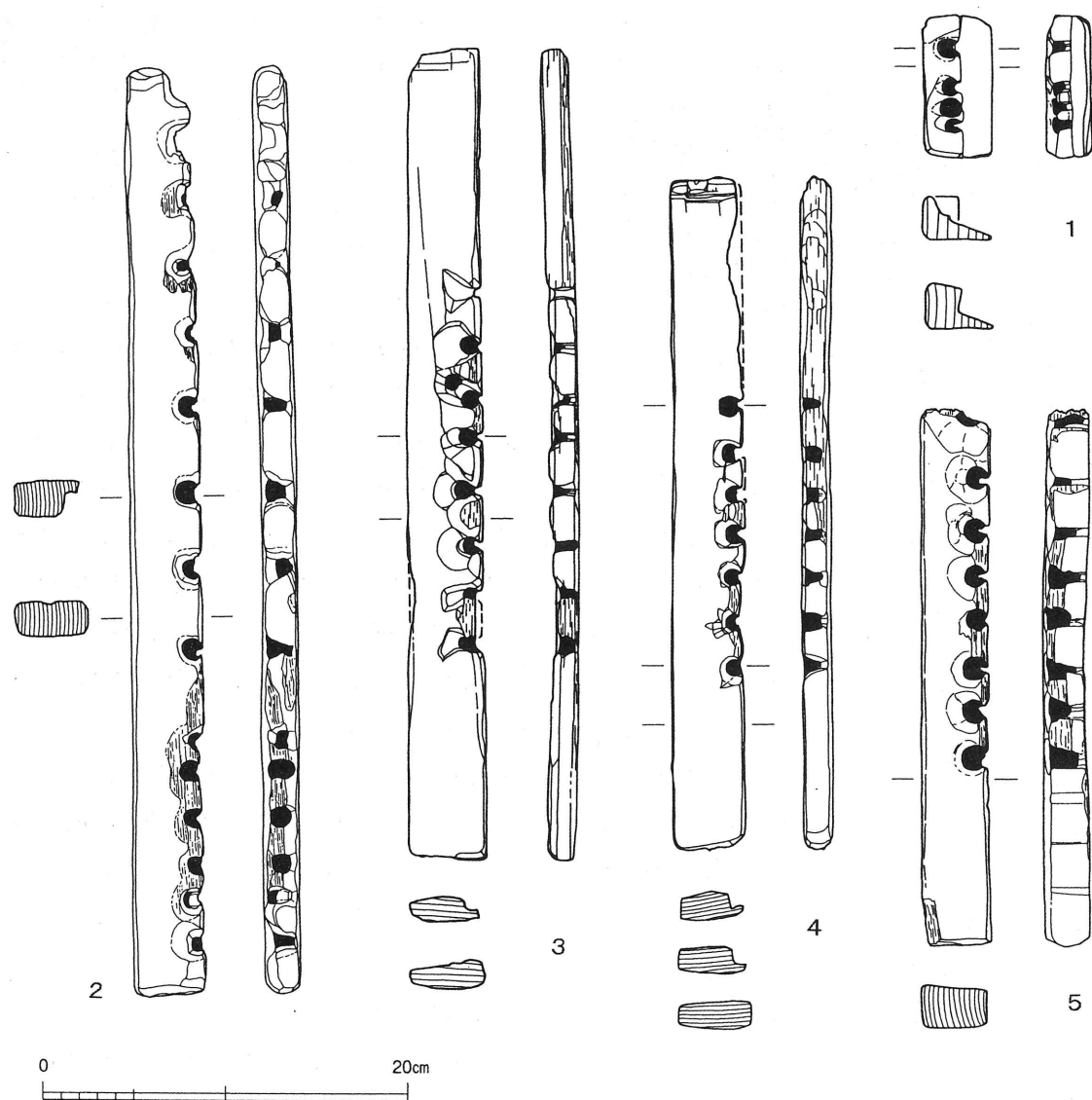


写真 4 実験で使った火鑽杵（ウツギ）



第2図 主な火鑽臼

1～5 袴狭遺跡

節の存在も考えると実際に使われた量はもっと多かったであろう。民間伝承で多くみられたウツギは「空木」ともいわれるように、幹が中空であることで知られており（写真4）、実際に実験を行った結果、火鑽臼には遺物に見られるような凸形の底ができた（写真2）。このように、民間伝承も考慮すると、古代においても火鑽杵にウツギが使用された可能性が高いと考えられる。

3. 火鑽臼について

火鑽臼は、(弥生時代)古墳時代～鎌倉時代までの10遺跡88点が出土している。そのうち80点が但馬からの出土で、地域的にかなり偏りがある。さらに、そのうち71点が、奈良時代から平安時代にかけて律令祭祀が行われた出石町袴狭遺跡、砂入遺跡からの出土であり、両遺跡だけで全体の約8割にも上る。

これらの火鑽臼は形態から大きく2者に分けることができる。一つは一般的に見られる断面が長方形をした長い板状のもので、もう一つはそれに火の粉を受ける台がついたものである（第2図1、写真5）。後者については、兵庫県では袴狭遺跡の1例しか確認されておらず、全国的にもあまり例はない。類例

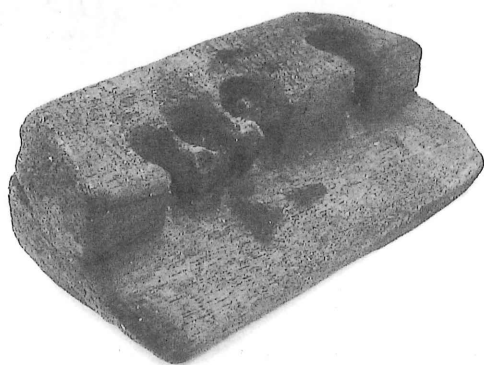


写真5 台付火鑽臼

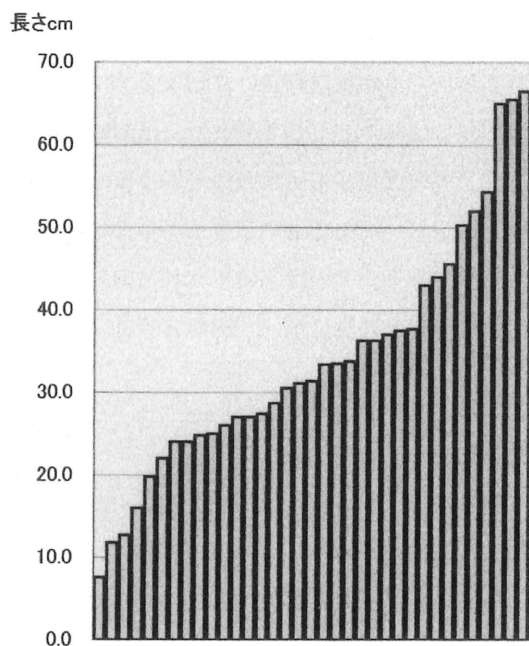
としては奈良県唐古・鍵遺跡（弥生時代）、富山県江上A遺跡（弥生時代）、岡山県雄町遺跡（古墳時代）がある。雄町遺跡例には小孔が穿たれており、大きさも9cm程度であることから、携帯用の火鑽臼であった可能性が指摘されている（高嶋幸男1985）。他の例には小孔が認められないが、破片のため不明である唐古・鍵遺跡例を除いて、江上A遺跡例は12.9cm、袴狭遺跡例も7.6cmを測り、いずれも小型で、携帯品であった可能性を支持する大きさである。

他の火鑽臼の長さについてみると、特にはっきりとしたグループには分かれませんが、大きくは20cm以下の小型品、20～40cmの中型品、40cm以上の大型品に分かれるようである（第3図）。最大のものは66.5cmを測る。大きさによる違いは時代を反映しているわけではなく、部材などの転用を考えると、時代や地域を反映するような厳密な規格を捉えるのは難しい。それは、幅、厚さについても言えることで、幅は2cm程度から5cm程度、厚さは1cm程度から2.5cm程度の範囲で偏ることなく存在している。

樹種については28点が同定されているが、そのうち台付の火鑽臼が1点のみエノキで、他の27点は全てスギである。ただし、樹種同定された資料は但馬地域で出土したものが多いため、但馬におけるスギの優位性を火鑽臼でも示しているだけの可能性もある（中村2001）。

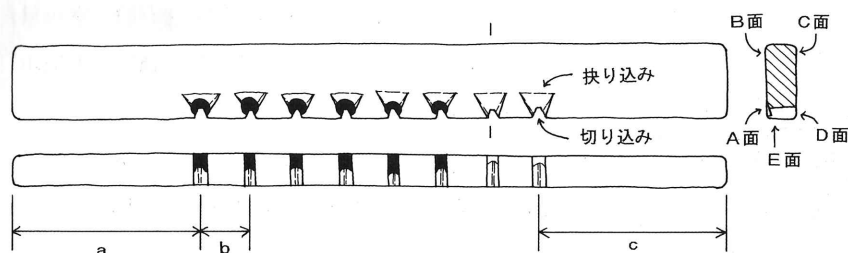
木取りは板目取りが55点、柾目取りが31点であった。例はそれほど多くないが、現時点では弥生から古墳時代で柾目取りしている資料は1点のみであった。

次に臼についてであるが、未完成の火鑽臼を観察すると、臼を開ける手順がある程度判明した。まず、



第3図 火鑽臼の長さ

臼を開ける位置を決める作業が行われる。その際、特に規格はないようだが、臼どうしの間隔はだいたい2～3cmのものが多く、この間隔が多いのは、近すぎると破損しやすくなるし、中途半端に長すぎると、材料に無駄ができてしまうためであろう。ただし、端から順にこの間隔で臼の位置を決めていったのではないようである。それは、火鑽臼の中には、ほぼ等間隔に臼が開けられているにもかかわらず、1箇所だけがずれて片寄ったものがあることによって示されているように、臼の位置を決めるには、まず両端が決められ、それから上記の間隔に近くなるように割付けていったようである。最初に決められる両端の位置については、その後の臼の追加があるため明らかにし難いが、だいたい端から10cm程度の位置と思われ、おそらく手や足で支える部分を確保したためと考えられる。また、大型の火鑽臼を割り付ける際には、両端以外に中央に



第4図 火鑢臼の名称と第1表の凡例

位置が決めるのであるが、その際を目印として、直線的な刃をもった道具を押しつけ、その圧痕によって臼を設定する場所の目印としている（写真6）。

ただし、全ての火鑢臼がこのような方法で作られているわけではなく、例外も存在している。

さて、臼の位置が決まると、次に切り込みが入れられる。切り込みの形状には、上からみて三角形になるものと、高さのある長細い台形になるものがあるが、それは意図してなされたものではなく、同一個体にも両者が認められることから、偶然の産物であると考えられる（表では前者がA、後者がB）。

そして、その切り込みに重ねるようにして挟り込みが入れられる。挟り込みは丸くなめらかに窪ませ



写真6 臼の割り付け

るものB（写真7）と、三角形で直線的に窪ませるものA（写真8）があり、これについては意図的になされたようで、同一個体においてばらつきはなく、挟る際に使用された工具も異なるようである。三角形に窪ませたものは、三角形の底辺の部分から、端側にある頂点にあたる部分へと、傾斜しており、火鑢杵が三角形の挟り込みの頂点付近で挟まることにより、外側に落ちないように工夫されている。

このように、火を鑢り始める時にはすでに複数の臼が準備されており、臼が使い終わるごとに新しい臼を作るのではない。そして、小型品は別にして、中型品以上の火鑢臼は未使用の臼が端に多い（第2図3）ことから、中央に近いところから火を鑢っていったようである。その際、使用された臼の痕跡から、火鑢杵は若干内側に傾いて回転させているよう



写真7 臼の挟り込み（○形）

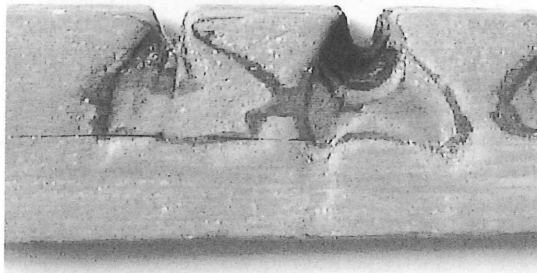


写真8 臼の挟り込み（△形）

である。三角形の挟り込みに引っかかるように力を加えた結果であろう。すべての臼を使い終わると、火鑽臼を支えるために空けた両端の空間にさらに臼を追加しているものもあるが（第2図2・5）、このときは板の端と臼の間を割り付けていることから、それ以前に割り付けられた臼の間隔と若干異なることとなる。また、臼と臼の間を埋めるようにして追加しているものもある（第2図2）。

火鑽り道具としては、これらの他に火の粉を受ける板状の台が必要となるのであるが、台付の火鑽臼は別として、遺物として認識されているものはない。「火起こし」の体験学習を行う際には火の粉を受ける板がいつも用意されているが、本来は紙や藁などの遺存しにくいものであったのかも知れない。

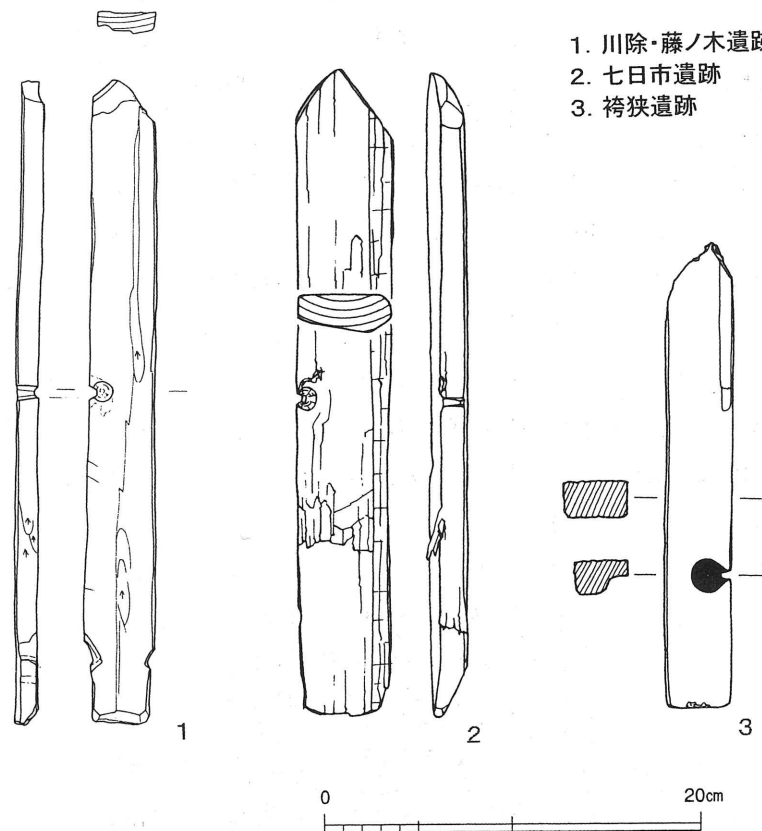
4. 木製発火具が語るもの

今回検討した木製発火具には、明らかに縄文時代・弥生時代と考えられるものがなく、木製品が大量に出土した神戸市玉津田中遺跡においてもそれは認められなかった。その原因として、全ての臼を使い切り、不要になると、木製発火具自体が燃料として燃やされてしまったためかもしれない。もし、そうだとすると、他の時代、特に古代においてまとまって出土するのには、何か特別な理由があるように思われる。

今回取り上げた木製発火具のほとんどが袴狭遺跡、砂入遺跡から出土していることは前に述べた。そして、この両遺跡は木製祭祀具を大量に使った律令祭祀の祓が行われたところであることも明らかとなっている。両遺跡で出土した木製祭祀具は 10,000 点近くにもなり、これらとの関係で木製発火具も考えられないものであろうか。もっとも、湿地を多く含む但馬の地理的要因のために多く遺存し、出土したとも考えられるが、それを考慮しても多いように思われる。両遺跡の資料は包含層からの出土が多いため、出土状況からは積極的な根拠を提示することはできない。しかし、火の習俗でいわれているような火の穢れ（直江ほか 1976 年）がこの時代にもさかのぼってあったとするならば、祓に際して新たに火を鑽り、そこで使用された道具を再度使うことなく投棄したと考えることは可能であろう。未使用の臼が残されているのも、そのためかもしれない。

それでは、祓においてどのようにして火が使われたのか。残念ながらこれについても何ら示せるものはない。少なくとも木製祭祀具が焼けていることはないので、あくまでもそれらは水に流すことが目的であったろうし、木製遺物で焦げが目立ったのは木皿と付け木程度である。鑽られた火が何かを燃やすためのものではなく、火として存在するだけでよいとすれば、燃料としての付け木しか出土しないのは首肯されることである。あるいは、もし何かを燃やしたとするならば、それらが出土しないのは燃え尽きてしまったためとも考えられる。また、焦げた木皿の存在が示すように、食器を燃やしていたとすれば、食器も祓の中で使用され、その後、穢れたものとして焼却しようとしたことも考えられる。しかし、いずれも明確な根拠があるものではない。

ただし、木製発火具が祭祀のなかで使用されたと推定できる資料がある。それは三田市川除・藤ノ木遺跡例で、井戸から火鑽臼と火鑽杵がセットで出土している。火鑽臼は全体が舟形に加工され、転用品を除く一般的な火鑽臼とは形態が異なっている（第5図1）。臼はほぼ中央に1箇所のみあり、火鑽りが行われている。先述したように、臼は火を鑽るたびに設置されるものではなく、前もって複数の臼を設置しておくものである。臼が1箇所しか設置されていないのは、設置当初から1回のみの火鑽りを予定していたためであろう。そして、もし、火を起こすのが目的であれば、1箇所の臼のみでは不確実で、複数の臼を用意するはずであるが、煙を立てるだけであれば1箇所でも十分可能であるので、この



第5図 舟形をした火鑽臼

1. 川除・藤ノ木遺跡
2. 七日市遺跡
3. 袴狭遺跡

1 箇所の臼は火を付けるのを目的としたものではなく、煙を立てることを目的として設置され、使用されたものといえる。

また、川除・藤ノ木遺跡で火鑽臼が出土した井戸の中からは、「田中」と墨書された須恵器碗や土師器小皿をはじめとする土器が 65 個体分、木製品は下駄、曲物、折敷、箸があり、他に砥石が出土している。また、近くには、裏面に「井」と書かれた呪符木簡や、陽物形木製品などの祭祀具が出土した井戸がある。この井戸からも「東田中」と墨書された須恵器碗、土師器小皿をはじめとする土器が 67 個体分、木製品は、櫛、

横槌、木錘、曲物、箸、付け木などが出土している。両井戸の時期は同じで、12 世紀中頃から末ごろのものである。

このように、川除・藤ノ木遺跡では、井戸において、井戸を対象とした祭祀が行われており、その井戸からは、陽物形や「井」と書かれた呪符木簡が出土していることから、ここでの祭祀は井戸水が枯渇しないために行われた水の祭祀であると考えられる。そして、その祭祀に木製発火具で作られた煙が使われていたものと考えられる。

一方、律令期の袴狭遺跡例は、この川除・藤ノ木遺跡例と時期が離れているという問題があるが、ここで用いられている舟形をした火鑽臼は、律令期の出石町袴狭遺跡と春日町七日市遺跡からも出土している（第5図2・3）。これらは川除・藤ノ木遺跡例と同じく、片側を山形に尖らせているが、特に七日市遺跡例では底面の前後にも削りがあり、立面的にも舟形となっている。そして、いずれも中央付近に1箇所の臼が設けられており、形態だけでなく使用方法においてもこれら3例は類似していることから、これらについても川除・藤ノ木遺跡例と同様に煙を起こし、水を呼ぶことを目的とした祭祀に使われたものであると考えられる。

以上の3例は水を呼ぶ祭祀において木製発火具による煙が象徴的に使われていたことを示すものであるといえる。そして、煙による雨乞いの祭祀は民俗例にも広く認められるところであるので（直江ほか1976）、袴狭遺跡において多数の臼が準備された火鑽臼が出土するのは、かつては木製発火具を使用して火を起こし、それを付け木、薪に移してより大きな火にし、そこから立ち上る煙によって水を呼び、そうすることで水を使った祓を円滑に進めることを祈っていたためと考えられる。そして、それがやがて

舟形の火鑽臼として象徴的に残っていったと考えられないであろうか。

5. おわりに

かつて、火は神聖なものであった。それは、古墳時代の住居内にあるカマドでの祭祀をみてもわかる。そして、それは形を変えつつも、カマドの神である三宝荒神として今も炊事場に祀られ、続いている。

さらに時代は進み、住居は安全性を考えたオール電化へと発展した。それにより、炊事はIHクッキングにとって変わられ、家から火が消えようとしている。秘めた力をもつ火が、その力のために、まさに「風前の燈」となっているのである。現代社会の複雑化と単純化。人間が長い歴史の中で培ってきた人間らしい本来の感情が、否応なしに大きな変化を迫られているのである。

古代の人が何を思って火を鑽り出したのか。火鑽臼を眺めながら、そのようなことを考えるのも、失われていく火の文化への憧憬があるからかも知れない。昔の人々が抱いた火に対する素直な畏敬の念が少しでもこれからの子供達に伝わってほしいものである。



写真9 子供らによる火起こし

【参考文献】

- 飯島吉晴 1976 年「家と火ーカマド・イロリと火ー」『歴史公論』10 火の民俗
- 高嶋幸男 1985 年『火の道具』
- 直江広治・任東権・宮田登 1976 年「＜座談会＞火をめぐる人間模様＞」『歴史公論』10 火の民俗
- 中村 弘 2001 年「兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所における木製遺物の樹種同定資料について」
『研究紀要』創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 兵庫県教育委員会 1985 年『筒江遺跡群 I』兵庫県文化財調査報告第 31 冊
- 兵庫県教育委員会 1990 年『山垣遺跡』兵庫県文化財調査報告第 75 冊
- 兵庫県教育委員会 1991 年『深田遺跡・カナゲ田遺跡』兵庫県文化財調査報告第 99 冊
- 兵庫県教育委員会 1991 年『七日市遺跡 (I)』第 3 分冊 兵庫県文化財調査報告第 72-3 冊
- 兵庫県教育委員会 1992 年『川除・藤ノ木遺跡』兵庫県文化財調査報告第 104 冊
- 兵庫県教育委員会 1992 年『堂田・八反長』兵庫県文化財調査報告第 108 冊
- 兵庫県教育委員会 1997 年『砂入遺跡』兵庫県文化財調査報告第 161 冊
- 兵庫県教育委員会 2000 年『袴狭遺跡』兵庫県文化財調査報告第 197 冊
- 兵庫県教育委員会 2002 年『入佐川遺跡』兵庫県文化財調査報告第 229 冊
- 兵庫県教育委員会 2002 年『五反田遺跡』兵庫県文化財調査報告第 227 冊
- 文化庁文化財保護部 1981 年『火鑽習俗』
- 山田清朝 1989 年「火打金について」『中尾城跡』兵庫県教育委員会



袴狭遺跡出土人形木製品より

兵庫県埋蔵文化財研究紀要 第4号

平成17年3月25日発行

編集・発行 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

URL <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maibun-bo/>

E-mail maibun-bo@hyogo-c.ed.jp

印刷・製本 (有) アロエ印刷

E-mail aloe-p@crux.ocn.ne.jp